

日本台湾学会第13回学術大会記念講演
「ベネディクト・アンダーソンとの対話」

2011年5月28日
於 早稲田大学27号館小野記念講堂

交錯する三本の道

—台湾研究、日本研究、方法としての感情—

梅森 直之

(早稲田大学政治経済学術院)

序—盗み聞きの愉しみ

いまわたしは、アンダーソン教授の基調報告と呉叡人氏のそれへの応答を聞き、深い幸福感がわき上がってくるのを抑えられずにいます。おそらく、その感じを率直に表現すれば、「盗み聞き」の愉しみといえるのではないのでしょうか。その報告と応答が、二人のすぐれた研究者によって行われた、きわめて刺激的な専門的応酬であったことはまちがいありません。しかし同時にそれが、アンダーソン教授と呉叡人氏の、いや、ベンとレイとの、長年にわたる、愛情に溢れた、個人的な対話の一部であることも、ここにいらっしやるすべての皆さんが、感じ取られたことと思います。この対話に横溢する親密さは、わたしを、ふとしたはずみで、二人の対話を立ち聞きしてしまうことになった第三者の立場に押しやります。「聞いてはいけないものを聞いている」。ある種の背徳感により、わたしの幸福感はあっというまに高まります。それは、この二人のあいだの対話が、すぐれた研究者の創作の秘密とでもいうべきものを、その情熱とともに、赤裸々に開示しているからです。「聞いてはいけない、聞いてはいけない」と自分を責めつつも、いまわたしは、その対話の内容の面白さにその場を離れることができず、じっと物陰からお二人の対話に、ひたすら聞き耳を立ててきたのです。

しかしながら「盗み聞き」の愉しみの代償は、現実にかえる時点で、返済されねばなりません。ふとわれに返ったわたしには、この濃密なお二人の対話にコメントするという、まったく野暮な役割が残されています。偉大なる師は、その神々しい世界史的知識を動員し、沈みがちな台湾の弟子を懸命に励ましました。そしてその弟子は、師のメッセージのなかに、日本における台湾研究の意義を探り当て、わたしたち日本における台湾研究者への激励のメッセージへと変換してくれました。さて、わたしは、いったい誰を、どのように励ませばよいのでしょうか。途方に暮れたわたしは、とりあえず、山から降りて、自分の足下を見つめ直すことから始めたいと思います。

国家衰退期の地域研究

日本台湾学会のホームページには、「日本台湾学会設立趣意書」という、1997年10月の日付をもった文章が掲載されています。日本台湾学会が設立されたのはこの翌年、1998年のことで

した。この文章は、前段で、台湾の地理的・民族的・歴史的特質を概説したのち、「台湾という地域が、学際的 (interdisciplinary) な地域研究 (area studies) の対象の一つにふさわしい濃厚な個性を有している」と述べ、日本における地域研究としての台湾研究の誕生を宣言しています。しかしながら、わたしにとって、1997年というこの日付は、「地域研究」であることをみずから宣言した日本における台湾研究が、実際は、きわめて非「地域研究」的であることを示す、何よりの証明であるように思われるのです。

「戦後のアメリカにおける地域研究の勃興は、この国が新たに担うにいたった覇権的立場を直接的に反映している」。アンダーソン教授は、その自伝的著作ともいえる『ヤシガラ碗の外へ』において、東南アジア研究を例にとり、アメリカにおける地域研究の誕生をこのように説明しています。また、東南アジア研究の批判的反省として、それがもつばら政治学と人類学という二つの学問分野に委ねられる一方、人文学的関心が停滞してきたアンバランスについても言及しています。この二つの特質は、アメリカにおける地域に対する主要な関心が、冷戦のはじまりから唯一の覇権国として君臨する現在にいたるまで、アメリカの世界に対する支配への意志によって動機づけられたものであることを示しているといえます。

一方、加藤剛教授は、同じく『ヤシガラ碗の外へ』において、こうしたアンダーソン教授の問題提起を受け、日本における地域研究の成立と展開について論じています。加藤教授は、東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所 (1964年) や、京都大学の東南アジア研究センター (1963年) の設立を、日本における地域研究の組織的はじまりと見なし、その時代的背景を、「共産党政権の樹立によって中国市場を失った空白を埋めるべく、東南アジアに対する経済進出のための政治的環境がほぼ整った時代」として説明しています。

アンダーソン教授のアメリカにおける地域研究の分析も、加藤教授の日本における地域研究の分析も、ともに地域研究という学問と政治との密接な関連を示しています。地域研究の組織的発展には、軍事的もしくは経済的に強大な国家の存在が不可欠である。そして地域研究は、そうした国家の軍事的もしくは経済的発展とともに発展する傾向がある。アメリカと日本の東南アジア研究の事例から、地域研究という学問の性質について、とりあえず、このように一般化することは可能であると思います。

1997年という日本台湾学会の誕生日が、きわめて重要な意味をもつのは、まさにこの点です。1990年代は、「失われた10年」とも呼ばれる、日本経済の停滞期でした。とりわけ、1997年には、山一証券が破綻し、1998年には、日本長期信用銀行が破綻しています。1993年から2002年にかけてのいわゆる就職氷河期は、若年世代から、未来に対する希望を失わせる結果をもたらしました。現在の日本が、依然としてこうした政治的、経済的、社会的停滞のなかにあり、したがって、「失われた20年」という新しい表現が登場していることはご承知の通りです。現在のわたしたちは、この先、いったい何年失えばよいのか、まったく見通しのきかない時代を生きているのです。日本における台湾研究は、発展期の国家にふさわしい学問であるはずの地域研究の一部であるとみずから宣言しながら、国家の危機とともに誕生し、その衰退とともに発展してきた点で、きわめて特異な「地域研究」であるといえます。

呉叡人氏は、先ほどの報告の最後で、日本において台湾を研究することの意味を、わたしたちに問いかけました。わたしは、その問いかけに、ひとまず、次のように答えたいと思います。日本における台湾研究は、ナンバーワンとなるという日本の野望が砕け散った時代にはじまり、そうした時代が二度とは訪れないという自覚の深まりとともに発展したという点で、支配への意志とは異なる別種の原理によって駆動された実践であると。こうした日本における台湾研究の特異な性格は、研究の内容の面から見ても、単に政治学や人類学だけでなく、人文学、とりわけ文学が、組織と研究の重要な柱をなしてきたという点にもあらわれています。

面白くない日本

通常わたしたちは、日本において、台湾研究の主体として台湾とかかわり合っています。しかし、アメリカに渡ると、わたしたちは、日本研究という地域研究の一分野となり、客体として、分析され、解釈される研究対象となります。地域研究に内在する、知るものと知られるものとの関係の政治性を感得するためには、日本が研究の主体となる台湾研究の場を離れ、日本が研究の客体となるアメリカの日本研究という場に身を置いて、考えてみるのが便利です。

アメリカにおける日本研究もまた、地域研究の一環として、1945年以後、組織的に発展しました。「汝の敵を知れ」(know your enemy) をモットーとして、戦争中に開始されたこの学問は、GHQの占領政策を支える重要な柱となり、冷戦のなかで、アジアにおけるアメリカの有力な同盟国を育成し、維持するための知的枠組みとなりました。アメリカの日本研究者、ハリー・ハルトゥーニアンは、こうしたアメリカにおける日本研究の特質を、端的に「かつての古い帝国を、新しいアメリカ帝国の周縁に位置づけ直す試み」と表現しています。

こうした来歴は、アメリカにおける日本研究が、東南アジア研究と同じく、支配への意志に貫かれた「地域研究」として誕生し、発展したことを端的に示しているにすぎません。さらにこうした日本研究の来歴を、やや詳しくたどるならば、大きくいって、そこに二つの危機の様相を認めることができます。その第一は、1970年代、ベトナム戦争の激化とともに訪れました。アメリカの対外政策と密接に結びついた「地域研究」のあり方は、ベトナム介入に反対する若く反抗的な学者たちによって、厳しく問い直されていきました。とりわけ、かつての敵を、アメリカの占領を経由して、「自由で民主的な」国家へ変貌させるという、当時アメリカで主流であった近代化論(modernization theory)的な日本理解は、アメリカのベトナムへの介入を正当化する論拠となっただけに、厳しい批判にさらされました。従来の「地域研究」的知のあり方を批判する、憂慮するアジア学者たちの委員会、Committee of Concerned Asian Scholarsが結成されたのは、1968年のことでした。その創立メンバーのひとりであった、ジョン・ダワーが、近代化論を批判するために、E. H. Normanの忘れ去られたマルクス主義の知的伝統を復権をもくろんで、その著作『日本における近代国家の成立』(*Origins of the Modern Japanese State*)を、復刊し、その長大な序文において、みずからの師であるエドウィン・ライシャワーに代表される戦後アメリカの日本研究を痛烈に批判したのは1975年のことでした。その三年後の1978年、エドワード・サイー

ドは、「地域」を研究するという知のあり方と帝国主義との密接な関連を、18世紀以後の西洋の知的伝統そのものの再検討を通じて暴露しました (*Orientalism*)。この時代以来、「地域研究」は、そのあからさまな権力との結合のゆえに、文化研究 (*cultural studies*) や脱植民地研究 (*postcolonial studies*) からの理論的批判に、さらされ続けてゆくことになったのです。

第二の危機は、まさにいま現在、進行しています。この危機は、より直接的に、アメリカの大学における日本研究プログラムの縮小もしくは消滅というかたちであらわれています。この背景には、アメリカの金融危機に端を発する大学の経営危機もしくは経営悪化があります。かつて日本研究の中心であったカリフォルニアの諸大学において、こうした影響は、とりわけ深刻なように思えます。しかし、トレンドとして見た場合、アメリカにおける日本研究の凋落は、1990年代の後半には、顕著になっていたように思われます。日本経済の弱体化につれて、アメリカの日本研究のために日本から支出される公的なもしくは民間の助成金はやせ細っていきました。一方、台頭する中国は、アメリカの興味と不安をかきたて、アメリカの「東アジア」研究の関心と資金の大半を独占するにいたりました。台頭する中国は、単に台湾ナショナリズムのみならず、アメリカにおける日本研究にとっても死活問題であったのです。アメリカの大学で、長く教鞭をとった英文学者、マサオ・ミヨシが、「Japan is Not Interesting」というタイトルで、挑発的に日本社会批判を繰り広げていたのは、1997年から2000年にかけてのことでしたが、その背景には、こうしたアメリカにおける日本に対する関心の低下があったように思われます。

こうしたアメリカにおける日本研究の来歴に、日本における台湾研究の来歴を重ね合わせてみると、その特質がうきぼりになります。それは、アメリカにおいて、「地域研究」の理論的危機が喧伝されるようになってはるかのちに、あえて「地域研究」であることを自称して立ちあがった知の枠組みであるということです。そしてその時期は、研究対象としての日本が、アメリカの学術研究における特権的な地位を喪失し、他の地域研究のなかに埋没していくその瞬間と重なっているのです。世界における地位低下の自覚から招ずるその不安が、ノスタルジーを捨てきれない日本の保守層に、強い国家とネーションへの希求を生じさせ、さまざまなバージョンの閉鎖的ナショナリズムを声高に主張させていることは見やすい道理です。日本における台湾研究は、そうした不安と内向的ナショナリズムが高揚する時代のなかで、他者を理解する新しい学知としてスタートをきることになったのです。

方法としての「感情」

アメリカにおける地域研究のこうした来歴は、アンダーソン教授の、地域研究者としてのユニークな道りをうきぼりにするうえでも、きわめて有効だと思います。アンダーソン教授は、こうしたアメリカの地域研究をめぐる知と権力のただなかであって、二つの異なる戦線での戦闘を同時に、そしてほとんど独力で、闘い続けてこられたことが明らかになるからです。アンダーソン教授が、アメリカの地域研究に内在する、支配の学としての側面に敏感に反応し、そのもっとも厳しい批判者のひとりであり続けたことは疑いのない事実であるように思われます。しかしなが

ら教授は、「地域研究」という枠組みを解体し、専門研究（discipline）へ解消しようとする方向性に関しては、一貫して批判的でありました。すなわち教授は、「地域研究」の厳しい批判者でありながら、同時にその保護者でもあるという細く険しい道のりを、その生涯をかけて歩き通してきたといえるのではないのでしょうか。その道が、ときにその両方の陣営から批判を受ける、きわめて困難な道であったことは想像に難くありません。しかし、教授のきわめてユニークな学問的業績、どのような地域研究の業績とも、どのような専門分野の業績とも似ていない、その独自の手触りは、その困難な道をひとりで歩き通したものののみが手にすることができる世界の風景を伝えているように思われるのです。

教授が独力で切り開いたその道は、結局どこへ続いていたのでしょうか。ここにおいても教授は、みずからの到達点を、けっして神秘化することなく、きわめて率直な言葉で、わたしたちに伝えてくれようとしています。アンダーソン教授が、アメリカ・アジア研究学会から、生涯学術功労賞（Award for Distinguished Contributions to Asian Studies）を授与されたのは、1998年のことでした。その贈呈式の記念講演で、アンダーソン教授は、地域研究をその主題として選びます。そのなかで教授は、地域研究を専門研究から分かつものは何かと自問し、それを、感情的な結び付き（emotional attachment）だと表現しました。誰よりも地域研究に対して批判的であった教授が、それでもなお地域研究を捨てきれなかった理由は、専門研究からは抜け落ちざるをえず、ただ地域研究のみが包摂することができる、感情（emotion）という要因のためであったのです。

感情的な結び付きに基礎をおく地域研究。これこそが、教授が切り開いた道が続いていく、最終的な到達地点であったように思われます。そしてわたしには、この地味で謙虚な表現が、支配の意志に基礎づけられた伝統的な地域研究を内側から組み変えるにとどまらず、近代以降の知と権力との本来的な結び付きを解体するための革命的宣言であるかのように思われるのです。

アンダーソン教授が、こうした新しい地域研究のための革命的宣言を行った同じ1998年という年に、日本台湾学会が誕生したという偶然を、わたしたちは、どのように理解すべきでしょうか。わたしにとって、アンダーソン教授の「感情的な結び付き」というフレーズほど、日本台湾学会の設立の経緯や、その後の研究活動の特徴をあらわすにふさわしい表現はないように思われるのです。日本における台湾研究は、伝統的な地域研究としてみるならば、きわめて遅く、おそらくは数周遅れのランナーとしてスタートを切りました。しかし同時にそれは、「感情的な結び付き」に基礎をおく、新しい地域研究のフロントランナーとしてのスタートでもあったと、解釈されるのではないのでしょうか。

2011年3月、日本は東日本大震災に見舞われました。それにともなう原発事故の影響もあり、一度はこの大会の開催すら危ぶまれたことは皆さんご承知の通りです。そしてわたしたちの前には、160億円を超える義援金が、台湾から日本に寄せられたという事実がおかれています（2011年5月上旬現在）。こうした日本と台湾の関係の「ユニークさ」を、はたして「感情」という要素を排除して説明できるものなのか。日頃、冷徹な客観主義者たることをモットーとしているわたしですら、自問せざるをえないのです。

台湾研究は、たしかに、日本における学問のなかで、歴史の浅い、マイナーな研究分野である

とというるかも知れません。しかしながら、そのなかには、アンダーソン教授の学問的業績とも響き合う、新しい知的革命の可能性が秘められているとわたしは思います。アンダーソン教授のいう「感情的な結び付き」を、支配への意志にかわる普遍的な学問的方法論として鍛え上げ、その成果を、世界へ向けて発信してゆくこと。新しい地域研究のフロントランナーとしての日本台湾学会の歴史的使命は、その点にこそともめられるべきなのではないでしょうか。そしてアンダーソン教授と呉叡人氏の、愛情にうらうちされた濃厚な学問的対話こそ、その豊かな可能性の一端を、具体的に示してくれたといえるのではないのでしょうか。

さて、物陰で聞き耳を立てていたわたしも、そこから出て、お二人の対話に参加させてもらうときが来たようです。でも、その前に、ひとこと、お礼をいわせて下さい。ベン、そしてレイ、すばらしい対話を聞かせてくれて、どうもありがとう。